

第6号

「自律」「協働」「対話」

令和8年度 長崎市立横尾中学校 学校だより

しなやか

しなやかに挑戦
できないと挑戦をはじめから諦め
ず、どう工夫し、どう改善すればい
いか柔軟に考え、対応していくこと

R 8. 7. 1 発行
校長：角 厚作

横尾っ子の心を見つめる教育週間

本校では今週から「横尾っ子の心を見つめる教育週間(6/30～7/6)」が始まります。教育週間の始まりの今日(6/30)にリモートで校長講話を行いました。話した内容は、次のような内容です。

この1週間は、学校生活の中で「命の重み」や「人の心の痛み」、そして「自分自身の心」について深く見つめ直すための大切な時間です。この取組の背景には、今から20数年前に長崎県内で続けて起きた、本当に悲しく痛ましい2つの事件があります。2003年に中学1年生の少年が4歳の男の子の命を奪う事件が起き、そのわずか1年後には佐世保市の小学校で、パソコンの掲示板に書かれた、ほんの些細な「言葉のトラブル」をきっかけに6年生の女の子の命が奪われました。長崎中が深い悲しみに包まれる中、学校や地域の人々は「二度とこのような悲劇を繰り返してはならない。地域全体で子どもたちの心に寄り添い、命と言葉を大切に育てよう」と強く誓い合いました。あの時の悲しみと決意を風化させず、過去から学んで皆さんを守るためにこの1週間があります。

佐世保の事件から、言葉は時として人の命を奪うほどの凶器になることがあります。現代のネット社会における文字だけのやり取りは手軽ですが、相手の表情は見えません。何気ない一言が画面の向こうの相手をどれほど傷つけているか、私たちは想像しなければなりません。一方で、言葉や人の関わりは、絶望の淵にある人を救う力も持っています。ここで、古市佳央(ふるいちよしお)さんという男性のお話を紹介しました。

古市さんは16歳の時、バイク事故で全身に大やけどを負う重体となりました。33回もの手術を乗り越え、命を取り留めましたが、変わり果てた自分の姿を鏡で見たとき、深い絶望から「いっそ死んでしまいたい」と自分で命を絶とうとさえしたのです。そんな古市さんの心を救ったのは、周りの人たちの「温かい言葉」と「関わり」でした。毎日泣きながら手を握り続けてくれたお母さん、事故の前と変わらぬ笑顔で「お前は俺たちの変わらない仲間だ」と会いに来てくれた友人たち。周囲の無条件の愛に気づいた古市さんは、「自分をこれほど必要とし

てくれる人がいる。生きていていいんだ」と気づいたのです。現在、古市さんは講演家として全国で命のメッセージを伝えています。「タイムマシーンで過去(事故の前)に戻りたいですか?」と聞かれた際、古市さんは「戻りたくないです。僕は今の自分が大好きで本当に幸せだから」と笑顔で答えました。「幸せかどうかは、周りの環境や見た目で決まるんじゃない。自分の心が決めるんだ」という言葉には、強い実感がこもっています。

私たちは言葉によって深く傷つきもするけれど、周りの人の温かい言葉や関わりによって救われ、もう一度生きていくこともできます。悩みを抱える時期、心が疲れてしまうこともあるかもしれません。しかし、皆さんが今そこにいて、一生懸命に生きている、ただそれだけで「100点満点」なのです。皆さんの命は代わりのいないたった一つの宝物です。そこで、2つの約束をしてほしいと思います。

1. 自分の言葉に責任を持ち、周りを支える言葉を使うこと

トゲのある言葉で相手を追い詰めるのではなく、傷ついている人がいたら「大丈夫?」と、相手の心を温かく満たす言葉をかけられる人になってください。

2. 心が苦しいときは、一人で抱え込まずにSOSを出すこと

心のバケツが空っぽになりそうときは、恥ずかしがらずに先生やお家の人に教えてください。私たちは全力で皆さんを支えます。

悲しい過去を経験し、それを乗り越えようとしてきた長崎だからこそ、私たちは日本で一番、言葉の重みを知り、お互いを思いやれる優しい人間に成長できるはずです。最初の一步、最初の一言を自分から。この1週間が、自分自身と隣にいる仲間をさらに愛おしく思える、温かい時間になることを心から願っています。

今週から「横尾っ子の心を見つめる教育週間」です。道徳の公開授業や様々な授業公開を行っています。是非、ご来校いただき、生徒の様子をご参観ください。

6/30 校長講話、被爆体験講話(家族・交流証言講話)

7/1 横尾地区100人パトロール

7/3 生徒総会

7/4 道徳(命)公開授業、講演(睡眠)、学年PTA